

モニター意見

無題

匿名

自然災害科学 Vol.24 No.1 2005 の中で最も興味深い記事は、2003年7月20日発生した熊本県水俣市宝川内集地区を襲った集中豪雨による土石流災害をとりあげた地域住民の行動・判断と題する報告でした。

ヒアリング調査は、集川上流及び下流域、集川右岸側の高台、集川の南側の谷、四箇所の住民から行われています。

各地区とも、大雨洪水警報に呼応して行動がなされており、とくに、地元消防団員による警戒活動と引き続く救出活動、携帯電話を含めた情報伝達が行われた経緯が伝わってきます。なかでも、集川の南側の谷に住む住民は、豪雨災害に対し警戒心があり、川の様子を早い段階で見に行ったり、消防への連絡も、いち早くなされています。

また、前兆現象についても調査がなされていますが、土石流災害に対して警戒心はあったものの、四つの現象は今回の災害の後で前兆現象として理解されたものでした。

結論として、土砂災害危険地域の住民の共通認識として避難と結び付けるには、自主防災活動や自主避難できる体制を普段から備えておかないと機能しないことが改めて確認されたとあり大変参考になりました。

特集記事「水害にどう立ち向かうのか」に思う

向谷 光彦

まず衝撃的だったのは、アウトドアライター、ジャーナリストなど、学会として新しい分野の方々に執筆をしていただいたことである。自然

災害は、科学分野に関係している学者だけの題材ではないことを改めて痛感した。私の居住している四国地方でも、平成16年度豪雨+高潮+洪水災害を、次世代にどう活かすか、南海地震への取り組みはどうかなど、異分野の方々との活動が始まっている。本当に地域に役に立つ学問として、あるいは学会活動として、このような地道な取り組みがなされていることは、非常に大切なことである。加えて「死のマップだ!」などと、インパクトのある言葉に市民が惑わされないように、研究者の学術的な裏付けも必要である。civil engineering の語源を回想する、いい機会である。住民やマスコミ関係者に災害への理解者を増やすことが、減災への近道ではないだろうか。

日本自然災害学会誌 Vol.24 No.1 を読んで

石井 恵

この学会誌を読んで、雑誌的には大変面白かった。但し、科学として捉えた時、記載内容は現象を冷静に細かく見つめるという点でまだ不十分なように思う。すなわち、調査目的が大まかで、現象を漠然とあれもこれもと雑誌的に収録している。もっとテーマを絞り込み、ミクロに観察し、現象や事象のメカニズム解明に取り組んでほしい。残念なことに、それぞれのまとめを読んでなるほどと思えるものが少ない。多変量解析における震央は人が選べないし、その位置の予測も難しい。水俣市に防災無線が必要と言われても当たり前だし。これでは災害学が急速に進むとも思えないし、防災に効果的なアクションを生み出すとも思えない。例えば、「あれも無い」や「これも必要」で無く、警報情報の伝達が何故遅れるのか、何故全員に伝わらないのか、どのようにすれば正確に伝わるのかなど、情報の種類・伝達方法・人や社会のその時の挙動や絡み具合など災害の実態に焦点を合わせて解明し、単なるお話に終わらせないでほしい。